

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

調査へ出発する日、念入りに老眼鏡の手入れをする私にモンゴル古生物学地質学研究所長のツオクトバートル博士が声をかけてきた。

「お互い年をとったなあ」

「地面がよく見えなくなってきたよ。あんたも化石発見能力が落ちただろう」と私。

「ああ、だから、同じ産地で長く滞在して、じっくり見るようにしている」

林原―モンゴル共同調査隊員として恐竜の骨探しを始めたころ、私はまだ30代後半だった。子どもの頃から視力2・0を維持していた私には地面上の化石がよく見えた。しかし40代から始まった老眼は確実に進み、乱視と目の筋肉の老化も加わって、眼鏡をかけてもピントの合う範囲が狭い。昔のように化石を見つけれなくなったと最近ひしひしと感じる。

同じ悩みを抱えるツオクトバートル博士の化石探査はどうか？ 彼は非常にゆっくり歩き、地面と目の距離を近く保つ。「緩近法」とでも表現しようか。

そこで今年の調査の前半で成果が出なかった私は、後半からツオクトバートル

③ 老眼と化石探査

氏のまねをした。狭い範囲でもよいから、腰をかがめたり、はいつくばったりしながらゆっくり歩いた。あまり動かないから楽である。しかも歯や爪、少しだけ顔を出した骨片などがしゃがむだけでよく目にとまる。改めてこれは高齢者向けの探査手法だと思った。

年をとったなと思うことはほかにもある。例えば今年の調査隊員18人の中で、私は最年長で、しかも日本側の代表であった。調査隊は組織であり、軍隊のよう

な統率も必要になる。安全でかつ成果の多い調査にするのが代表者の仕事である。メンバー全員の心身の状態に気を配りながら日蒙のコミュニケーションを促進し、天候その他に対応してスケジュールと仕事内容を決めていく。

代表者はあまり化石を見つけないでよいから隊として良い雰囲気を保たねばならない。今年心がけたことは、朝一番に起き、キャンプテーブルの前に

手法変更 ゆっくりと

デンと座ることである。起きてくる隊員に「サインバイノー。サイハンアマールスノー（モンゴル語で「お早う。よく眠れたかい」）と声をかけていく。自分もそんな立場になったのだなと感慨深い。

さて、老眼についてだが、一緒に調査した岡山理科大学理学部の豊田新教授から「私は眼鏡を二つ持って、距離に合わせて使い分けています」と聞いた。なるほど、それはいい考えだ。来年は立って足元を見た時に焦点が合う化石探索専用眼鏡を持つてくることとしよう。そう考えたとなぜか急に視野が明るくなり、来年は大物が見つかりそうに思えてきた。



隊員はこんなところで化石を探す（ゴビ砂漠南東部バイシンツァフ西方で）

（岡山理科大学教授）

＝随時掲載